

# 野に仏・里に仏

大谷 眞

エピソード・そして今もへんろは続く

2001年7月1日晴れ

歩いたことになる。

1994年から翌年95年にかけて、区切り打ち八回をもって歩き通したへんろは、あの神戸淡路大震災のまさにその日、雪の中、一人結願した。翌日、靈山寺にお礼参りを済ませ、その長かった旅を終えた。

振り返れば、通算五十日、この内、実際歩いた日数は四十六日となる。かかった総費用は行き帰りの交通費を含め、三十三万千八百六十六円、距離は計算上、千六百八十八キロ

歩いたことになる。実はこの後、車でのお遍路も体験した。一写真家として、徒歩へんろの間、どうしても力メラを向けられなかった人、すなわち、私のへんろ体験において、お世話となり、その後の私の生き方に、何らかの示唆を賜った方たちを、ぜひ、自分の記憶として、残しておきたかったからだ。

二度のへんろを通し、痛切に感じたことがある。徒歩でのへんろと、車でのへんろとの差だ。靈場

をお参りする意味では、どちらも同じかも知れない。しかし、その二つには、決定的な違いがある。それは、車でのへんろが、靈場にお参りすることそのものに意義を見いだすのに対し、徒歩でのへんろは、靈場はむしろ旅の一里塚、その道中こそが、へんろの神髄ではないか、と言う思いである。

歩いていると見えてくるものがある。頭に浮かんでくるものは、ただただつらい、足が痛い、本日の予定した目的地はまだか、などたわいの無いものだ。過去、巡り合った人たちのことを思い出すこともある。すでに今世ではお目にかかることもない方たちのことも。その人たちと、自分との巡り合わせの不思議を考え、その意味を考え、どれだ





けその方たちに対し、誠  
実であったかと考えるこ  
ともあった。そして、時に  
頭が真っ白な状態、すな  
わち、ただ何も考ええず、ひ  
たすら歩いていった時も  
あった。

そんな時、名も知らぬ  
花を見る。自分が過去ど  
うであったかとか、今の  
自分が置かれてる社会的  
状況がどうだとか、もっ  
そんな世のしがらみも意  
識から薄れ、ただ、歩い  
て、食べて、排泄して、寝  
るだけの自分を通してみ  
ると、目の前の花一つ、同  
じ目線で見る事が出来



したくなるような、喜び  
でもあった。そんな発見  
を、心から感謝したくな  
る。目の前の花が、そんな  
にがむしゃ  
らに頑張ら  
なくても良  
いよ、そう  
微笑んでく  
れている様  
な気がす  
る。始めは  
恐る恐る体  
験した野宿も、ある時期  
から、自然の懐に抱かれ、  
同化できるような、そんな  
不思議な幸福感をも感  
じ始めていた。

た。花一つ  
の重さと、  
今の自分  
と、同じ価  
値で感じる  
ことが出来  
た。それは  
愉快でもあ  
り、泣き出  
ると擲掬されがちな車へん  
ろでは、この貴重な発見  
は抜け落ちてしまう。だ  
から、もし、時間的な余裕  
と、少しだけ無理できる  
資金と、人並みに歩ける  
足があるなら、ぜひ歩い  
て欲しい、と機会あるた  
びに、人に語ってきた。今



ていたとしても。

徒歩へんろから既に6  
年、私にとってへんろと  
は何だったのだろうか？い

こんな不  
思議な体験  
を無くし  
て、へんろ  
を語るのは  
寂しい。霊  
場から霊場  
への、スタ  
ンプラリー  
つも考えている。もう終  
わったのだろうか、とも。  
いや、それほど簡単に忘  
れ去るほど、決して軽い  
存在ではなかった。だか  
ら、私の中のへんろは、今  
もまだ続いている。毎日  
の出会いの中で考え、喜  
び、怒り、悩むことは、あ

の旅の日々と同じだ。ただ、痛むのは足ではなく、心だ。痛みを耐えて、しかしただ歩み続けることで、今も何かを探している。この行く手に、何かが待っていてくれる、という信念が、私を歩き続かさせている。

四国をへんろしている  
と、いつか、お大師さんに  
巡り合うことが出来る、  
と言う。と言っても、その  
お大師さんは、なにも僧  
の身なりをされているわ  
けではない。人によって、  
いろんな出会いが、後に

なつて大きな意味を持つ  
ことがある。そのきつか  
けを与えてくれた人を、  
そう言えば、あの方こそ  
お大師さんであったので  
は？と思う不思議が四国  
にはある。今回、拙文と併  
せ掲載していただいた写  
真の方々は、私にとって  
の「お大師さん」だった。  
またいつの日か、お目に  
かかれる日を切望してい  
る。

仏はどこにでもおられ  
る。野にも、里にも。そう  
信じたい。すべてに感謝。  
すべてに合掌。

(完)



心の師・手束妙絹尼